

宮城県漁業協同組合連合会第六代会長
全国漁業協同組合連合会理事

阿部 國夫

【あべ くにお】

-
- 1921(大正10)年 4月10日、荻浜村小竹浜
(現石巻市)に生まれる
- 1962(昭和37)年 小竹浜漁業協同組合組合長
- 1972(昭和47)年 宮城県漁業協同組合連合会理事
- 1978(昭和53)年 宮城県漁連副会長理事
- 1990(平成2)年 宮城県漁連第六代会長
- 1992(平成4)年 全国漁業協同組合連合会理事
- 2008(平成20)年 2月18日死去

海との調和をふたたび
なぎ
凧の人が果たした漁業の転換

船主の長男が描いた夢

牡鹿半島の付け根にある小竹浜は、入江が浅く外洋の影響を受けやすい。船を舫い、漁を営むには波を抑えなければならぬが、入江に蓋をするように浮かぶ弁天島が浜を良港とした。ゆえに人々は、島に龍神でもある弁天様を祀る。

阿部國夫はこの波穏やかな浜で、漁船の船主の長男として生まれた。五人きょうだいの四番目で、三人の姉と妹がいた。

小竹浜では家を屋号で呼ぶ風習があるが、船主は船が豊かさのしるしとなったので、國夫の生家は、持ち船の「萬亀丸」という名が家の通り名になっていた。

※ばんきまるのくにおさん

そう呼ばれることは、浜の人々に敬われ、慕われたことを物語っていたのだ。

國夫は渡波の宮城県水産学校（現宮城県水産高校）を出ると、函館水産高等学校（現北海道大学水産学部）へ進む。

後年、彼は新聞のインタビュで、子どものころの夢は捕鯨船の砲手になって南氷洋に行くことで、函館の学校へ行ったのも「船長の免状をとって砲手になるつもりだった」からと話している。船主の長男ながら夢のために学問を修めることができたのは、何より生家が裕福だった証だろう。

しかし捕鯨船の砲手になって南氷洋に行く夢は叶わなかった。高校在学中に志願し

て入隊、南方戦線に赴いたが病を得て帰還し、戦後しばらく療養したからだ。さらに、わが子の健康を不安とした父母は、國夫に家業を継がせず、長女に婿を迎え継がせた。

ここでもし彼が病を得なかつたら、と考えてみる。家業を継いだか、あるいは思い描いた通り捕鯨船の砲手になつただろうか。

阿部を「くにおさん」や「あべくにさん」と呼ぶ人やともに仕事をした人は皆、彼を「温厚で優しい人だった」と言う。いつも笑顔を絶やさなかつたと思ひ起こす人もいる。彼がもし違う人生を歩んでいたら、背広で仕事をする 것도、組織のトップとして苦勞することもなかつただろう。しかし一方で、その人柄を思い起こし、彼について語る人もこれほどはいなかつたかもしれない。

弁天様の海に育まれて

療養し健康を取り戻した阿部だが、実家の船は徴用のため失い、沖に出るすべはなかつた。それでも小船に乗って刺し網をすれば、食うには困らない程度の漁はあつた。小竹浜漁業協同組合に入り、漁のかたわら事務員として働いた。そして昭和二十七年、専務理事になる。

その年の五月一八日の夜、小竹浜は大火に見舞われた。翌日は小学校分校の遠足の

予定だったので、枕元に用意していたリュックを持って逃げた、と思いつく人もいる。一一〇戸余りのうち六三戸を焼失した火事は、『石巻市史』にあるように、全滅大火だった。

このとき浜のリーダー的立場にあった阿部は、被災した住民の再建資金を確保するため、一人、県庁や仙台の農林中央金庫に向いたという。どんな条件で幾ら借り入れたか記録はないが、百円紙幣をリュックいっぱい詰めて帰ってきた度胸と行動力に、浜の人々は度肝を抜かれた。

漁でも尽力した。自らが「定置網の新しいやり方」と語った建網を導入したことで豊漁が続き、住民たちは再建のために借り入れた分を返済した上に、生活も上向いたという。

さらに昭和五〇年頃には「粕谷式定置網」を宮城県内で初めて導入し、浜をふたたび活気づかせた。内湾の回遊魚漁に適した定置網は西日本で実績を上げていて、評判を耳にした阿部はその可能性に賭けた。

「波穏やかな小竹浜にはうってつけの網だろう」。読みは当たり、浜は空前のニシン景気に沸いた。

吉野八重子は、小竹浜漁協のころから阿部とともに働いてきた。当時の様子を振り返る。

「國夫さんには、新しいものをどんどん取り入れる先見性があったと思います。新

しい網にしてからニシンが面白いように獲れて、おかげで家を新築した人もいました。町へ行つて、小竹浜の者だと言うと、ああ、ニシン御殿の、と言われることもありました」

こうして浜を豊かにした阿部が人望を集めたのは言うまでもない。彼の働きを支えたのは、穏やかで豊かな弁天様の海だ。この時代、浜の生態系と暮らしのリズムは調和していたが、同じころ、日本の漁業は二〇〇海里問題に直面し、大きな岐路に立たされていた。そして阿部はこの後、宮城県漁業協同組合連合会（以下県漁連）の会長として転換を迫られる地域漁業を率いることになる。

漁業に突きつけられた責務

一九九〇（平成二）年、阿部は県漁連会長に就任した。

資源ナシヨナリズムに端を発した二〇〇海里規制は、わが国の漁船を外国の領海から締め出し、操業の場を公海へ移動させたが、公海での他国との漁獲競争が強まると、このころには乱獲と漁法が問題になった。

二〇〇海里問題はもはや感情の対立ではなく、資源保護問題として漁業に転換を迫ったのだ。これによりスケソウダラ漁が大幅に削減され、希少生物の混獲防止を目的に規制を繰り返してきた流し網漁も幕を閉じ、漁師の豪勢なイメージとともに一時

代を築いた北洋漁業は衰退した。

阿部は会長就任に際し、機関紙に厳しい環境にある漁業を変える決意を寄せているが、そこでは資源管理型漁業の充実をとくに訴えている。

「底引き網が発達した。定置網とは違い、待つて獲るのではなく、産卵場もごっそり引いてしまう」

漁業資源の問題を述べ、育てる漁業への取り組みが重要とした考えの裏には、小竹浜で実践した定置網への思いがあったかもしれない。もちろんすべての漁業が定置網で間に合うはずもないが、漁業に自然との調和を取り戻すことが重要だと強く意識していたに違いない。

また阿部が戸惑いを感じると話した漁業技術の進歩は、環境問題となって表れた。漁具はどんどん改良され、効率のためつねに新しいものの利用を求めたが、廃棄物処理問題は、漁場や浜の環境を壊し漁業自身を苦しめた。

一九九二（平成四）年、阿部は浜に野積みされ悪臭の原因になっていたカキ殻の再利用に取り組んだ。

当時建設がスタートした日和港（石巻市）の埋め立てと防波堤建設への再利用を提案すると採用が決まり、カキ殻は建設資材として再生した。これはリサイクルと省資源の建設を推進する一石二鳥の事業モデルとして全国から注目を集めた。

資源と環境保護の流れは、日本の漁業に大きな転換を促した。これ以前の漁業は思

いのままにできたから仕事は洋上で完結したが、時代の波は漁業を漁獲だけでは済まないものに変えた。漁業は新しい債務を突きつけられたのだ。阿部はそうした波を乗り越え、調和によって漁業に新しいチャンスをもたらした。

人の調和で漁業を守る

船渡隆平は県漁連に長く勤め、部下そして専務理事として阿部をサポートしてきた。仙台と石巻、県内各地を行き来する車中でいろいろな話を聞いたが、阿部はいつも「漁業は協同の力で守るべき」と話した。

阿部のライフワークにもなっていた沿岸漁業での資源管理型漁業への取り組みは、獲る魚の大きさを規制することで地区ごとに進められた。しかしバラバラな規制は、ある地区の規制が、他の地区の漁の妨げになるという新たな問題を生んだ。

これを象徴するのが、回帰サケ・マスの漁獲問題だ。サケ・マスは川に帰さなければならぬが、遡上を前に沖合網で漁獲されることが多かった。それではサケ・マスは育たない。そこで回帰時期に網を引き上げることが求められた。しかし回帰を確実にするには、県内のすべての網主が同時に行なわなければならない。魚が網を避けて川を目指すわけではないからだ。

「サケ・マス回帰のために、一斉網上げを実現しよう」

もはや漁業にエゴは許されない。阿部は、新しい漁業には海との調和の前に、人の調和も必要と語り、自ら県内の定置網業者を訪れ、説得に当たった。こうして県内一斉の網上げを実現させ、内水面ふ化場の経営安定と資源育成に貢献した。

漁業における協同の大切さを説いた阿部は、県内三一の地区漁協が合併することを強く望み、会長を退いた後も活動を続けた。そして平成一九年、願いが叶い、三一の漁協と県漁連、さらに宮城県信用漁業協同組合連合会を包括して宮城県漁業協同組合が誕生した。それは、阿部國夫がこの世を去る前年のことだった。

心に凧の海を持つ人

阿部哲は、國夫の甥にあたる。宮城県水産高校の後輩でもある。卒業後は、無線通信を学び、捕鯨船に乗った。甥は叔父の夢を叶えたのである。

そんなつもりはなかったけどね、と言いながら、哲は叔父のことを話す。

「同じ道を望んだのも血筋なのかな。叔父もそう考えたことがあったとは聞いたが、そのために学校に行ったとはね。夢だったんだね」

阿部は、同じ夢を持つ甥に口うるさく言うことはなかった。ただ、仲間の伝を頼り、甥の夢がうまく運ぶように支えた。伝えたいことは幾らでもあったろうに、そうせずに見守ってくれたのも、くにおじらしいな、と話す。

いつも穏やかだった阿部だが、仕事のことになると熱く語り、ときには話が止まらなくなることもあったという。とくに漁業関係者の団結が求められるような問題では、言葉が激しくなることもあった。

哲の妻明子は、あるとき、漁のことで叔父の口調がいつになく激しいのが気になり、さりげなく意見したことがある。黙って聞く叔父を前に、怒られるかと思ったら、急に笑顔になり、冗談話を始めたという。そのときは、話を通じないからとごまかしたのだろうと思ったが、いまになると身内に心配をかけまいとする叔父の気遣いだったのだと思うという。

県漁連会長という重責では、言葉にできない鬱積もあったに違はなく、穏やかな笑顔の内には、鉛のように重いものを抱えていただろう。激務のかたわら、暇を見つけて海に出て網を立てたというが、それが何より心を癒した。

「魚の顔を見るとホッとする」

冗談めかしてそんなことも言っているが、気苦労を思うと、それは半ば本心だったのだろう。

仕事での阿部は、奢らず、好悪を表にするのを良しとしなかった。そこには、自分の主張を抑えて周囲を気遣う、静かで強い意志があった。

「部下としていろいろサポートしてきたけど、今思うと、あの笑顔にこつちが支えられていたように思う」。船渡は、[〃]会長[〃]や[〃]あべくにさん[〃]と慕った人の心の大き

さに思いを馳せる。

吉野は、定置網の建て方にも優しさが表れていたと話す。「ニシン漁が盛んなころ、沖では網が立て込んでいました。やり方次第では自分に良いように網を立てることもできましたが、國夫さんは、なるべく多くの網に漁があるようにしました」。

その人柄を偲ぶ言葉から思い浮かべるのは、穏やかな海の景色だ。静かで、強くて、大きくて、優しい海。そこは、どんな問いを投げ入れても決して波立たない。阿部國夫は、そんな風の海のような人であった。